

石川南部区域事後評価第1回第三者委員会議事録

日時：平成18年5月18日（木）13:30～15:00

場所：平田村農業改善センター

事務局： 只今より、平成18年度緑資源機構事業石川南部区域事後評価第1回第三者委員会を開催いたします。開催にあたりまして、農林水産省農村振興局の鈴木室長からご挨拶を申し上げます。

評価副委員長：本日は、石川南部区域につきまして、午前中、現地を視察して頂きありがとうございます。ありがとうございます。

また、福島県の方々、それから町村の方々、今日の現地調査のためにいろいろと段取り、準備等、ご協力頂き、御礼を申し上げます。

これから、第三者委員会の意見交換に入るわけですが、すでにご存知のように事業完了後にどのような効果が発現しているかを見て頂きまして、意見を踏まえて、事後評価をまとめて参りたいと思っております。これは、公共事業の効率的な実施のために透明性を図りながら進めていくということで取り組んでおります。

今日は、現地を見られた意見を踏まえて、いろいろと忌憚のないご意見を伺いたいと思っております。

また、この会議の議事録等や評価については公表いたします。それを踏まえて、今後の事業の推進のために反映させていきたいと思っておりますし、実際事業が完了した区域につきましても情報を提供して、うまく効果を発現できるように県の方々、町村の方々といっしょになって取り組んでいきたいと思っております。

事務局： それでは、ただいまより議事に入りますが、ご出席の皆様を紹介させていただきます。

<事務局より出席者の紹介（別紙出席者名簿）>

事務局： つづきまして委員長の選出ですが、委員の中から委員長を互選して頂くことになっております。どなたか立候補される方は、いらっしゃいませんか。

<委員から「熊谷先生」の声あり>

事務局： それでは、熊谷委員に委員長をお願いしたいと存じます。熊谷委員、よろしく申し上げます。

熊谷委員長： それでは、本年度の運営について説明して下さい。

事務局： <平成18年度の運営について説明>

熊谷委員長： 運営について、よろしいでしょうか。
それでは石川南部区域について説明して下さい。

事務局： <事後評価調査の結果説明>

熊谷委員長： ご意見のある方からどうぞ発言してください。

鈴木委員： 先ほどの説明を聞いていて、現象面はパーセンテージで増えた、減ったというのは分かるのですが、その要因がどこにあるのかが分からないので、地域の農業の実態を説明したことになるのか、ちょっと気になった。

たとえば、4ページの上から3行で農用地は減少傾向にあって、福島県全体に比べても県の減少率を上回る勢いで減少しているが、4ページの4行目以降で関係町村全体の農業粗生産額の減少率は県平均よりも下げ幅が小さい。それはたとえば「汎用化が進められて、水田以外の耕作に変わったからだ」とか、説明がないとこの記述だけではよく分からない。全体を通して、何%になりましたという記述に終わってはいないだろうかという印象です。

15ページの費用対効果の算定で、林業経費節減効果があります。しかし、石川南部区域での森林の保育等のデータがどこにも出ていない。「森林面積が何千ヘクタールあります」というのはありますが、林道がどういう実態になっているかというデータは、どこかに触れていましたか。なぜ、それで、林業のことが評価の視点に加えられているのかが、よく分からない。これが基本的な説明資料だとすると、データの記載がないとよく分からない。

また、「ひらた高原朝採り野菜の会」ですが、私はこの会に色々と話を聞いているのですが、この事業と直接的な係わりがありますか。「ひらた高原朝採り野菜の会」を波及効果として評価に入れようとしています、どういう関係なのか、掴みにくい。

熊谷委員長： この事業が進むことによって、この会が生まれてきたと考えるのかどうか、ということです。

事務局： 波及的効果は金額換算で効果に入れることはせずに、記述的に書きます。

鈴木委員： ある種の因果関係として説明が成り立たなければいけないと思う。

熊谷委員長： 結局、1枚紙で評価のフローを書いてあるが、事業の成果を4つに集約して

話をすると、今、鈴木委員がおっしゃったように最初の説明資料から全部関連性をもたせて文章化していかなければならない。抜けがないようにしなければいけない。

私も「ひらた高原朝採り野菜の会」をそのように結びつけるのは、無理があるのではないかという気がする。

波及的効果として1.0という数値を計算するのに、やはり効果として中に取り込むかどうかをきちんと説明できるようにしてほしい。

事務局： 集出荷場に「ひらた高原朝採り野菜の会」の会員が作物を運ぶのに、農業用道路を利用しています。

また、地域の真ん中を通っている農道なので、全線を使わなくてもどこかで確かに使っているという意味です。沿線には農地も多く集落もあり、農業用道路を通して最終的に物流は全部49号線に集まって郡山方面、いわき方面に行っております。

鈴木委員： ここに記述されているように、スーパーがやってみないか、というのが直接のきっかけです。それでは、なぜここにそういう声をかけるのかとか、そういうものが平田村の農家にとって、どういう背景のもとに成り立っていたのかというところがないと、ストレートに今回の事業によってもたらされたという話にはならないだろう。

事務局： こういった「ひらた高原朝採り野菜の会」が発展していくために、農作物を運ぶのに農業用道路が使われていると思います。

熊谷委員長： 15ページの農業生産向上効果で水田の汎用化に伴う効果として転作による高収益作物への転換が挙げられるとあるが、たとえば今日見たところで、どの団地を指しますか。

事務局： 今日見たところは、(受益地の)水田と畑の一部です。

熊谷委員長： 鈴木委員が(農家へのインタビューで)、道路ができ事業が進んできて、経営的にどう変わったか、作付けがどう変わったかと質問されましたが、それについては農家の方は答えなかったですね。

だから、転作による高収益性作物への転換というのが説明のなかで随所に出てくるが、どこできちんと説明できるのか。説明資料のなかにきちんと記述すること。

事務局： 今日見なかったところで、他にも畑作をいろいろと実施しているので確認します。

加藤委員： （事業費的に）事業のメインは農業用道路整備ということになるが、農道整備を計画する場合は、計画交通量を計算していると思うのですが、今回の評価は事後評価ですので、当然、実際の交通量を調査しているのか。

事務局： 今回の資料にはついていませんが、交通計画量の調査を昨年実施しています。その調査結果を一般交通量として効果算定に使っています。

加藤委員： そういった調査の結果は、資料に出てきてよいのではないか。
結果的には計画通りになっていないかもしれないけれど、地域住民の皆さんが評価している。

鈴木委員： 農業政策でB / Cが1 . 0を越せるんですか。

事務局： 林業の効果は、当初入れていなかったのですが、事後評価時点で聞き取り調査等で確認したことから追加しております。

鈴木委員： 農業用道路ですけれども、町村に移管してますよね。その後の維持管理経費はCのなかに入れるのですか。

事務局： 実態ベースでBの中にマイナス効果として入れています。

木村委員： B / C を算出する場合、生活の利便性とか地域の日常生活が非常に便利になったとかそういうのは特に入れずに、波及的效果のなかに記述的に入れるのですか。

事務局： 一般交通についての経費節減の効果は算定していますが、例えば買い物に行くのが便利になったとか、病院に行くのが近くなったということは、定量的に数値化するのはかなり難しいので、算定までは至っていません。

定量的評価だけでなく、アンケート等で収集した皆さんの声を整理した定性的評価を合わせたものが評価だと考えています。

木村委員： 農業用道路ですから、一般的には農作物を輸送するのに便利になったということがあられるでしょうが、それに附属して一般の人が便利になったということがでてくるとは思いますが、どちらが多いということまでは分からないのですか。

事務局： 農家、畜産の方々が利用し直接効果を上げており、やはり、農業における効果が大きくでています。

生活の利便性などの効果については、それをどう評価するのか、今のところ、算定の手法が決まっていなくてもありますが、客観的にできるものについては入れるようにしており、今回、林業の効果分について入れました。

本当は、もっと先生が言われるように色々な性格の効果があるのだと思いますが、いまのところ、それを算定する一般的な計算方法は成り立っていないので、どうしてもこういうような形になります。

こういう中山間地域の農地は、わりと奥地にある農地では、耕作放棄される可能性が非常に高い。それが農業用道路の側にある農地では、耕作されていて、水田の有する多面的機能、例えば土砂流出防止に役立つわけですが、こういった効果の算定については、手法がまだ農水省のなかで確立されていません。本来は、生産面以外にこういうものを効果として入れていくことが重要だと考えています。

鈴木委員： 農業用道路を作ることによって、農振地域に指定するなんてケースは、今回の場合あるんですか。

事務局： 農振地域は各市町村のほうで、内容を分析して随時指定したり、外したりできます。

鈴木委員： 結果的にここで、そのような成果を読み取れるんですか。そういう分析はされていないのですか。

事務局： そこまでは調べていません。

熊谷委員長： 農地面積が減っているといっているけれども、（農家へのインタビューで）道路を作った周辺では減っていないという表現がありました。農業用道路を作った周辺の計算をしてみれば農道を作ることによって、その周辺の集落の農地が維持されるようになったというふうに表現できるのではないのでしょうか。そうであれば、町全体の農地面積ではなくて、集落カード等で農地面積を別途計算してみるということが必要でしょう。全町まとめて計算するから、転用がでてくるので、農業用道路そして、暗渠排水、農業基盤が良くなったから、そういう周辺での農家集落では農地面積が減るようなことはなくなったと表現すればよいのでは。

事務局： データを見てみないと分かりませんが、これから調査をするというのはなかなか難しいので、そういった分析ができるかどうか調べてみます。

アンケートのほうにも、これをやらなかったから、新しい作物が入らなかったと思うかどうかといったことも聞いているので、そういう表現を交えつつ、表現を工夫してみます。

熊谷委員長： 今日、農家の人に事業をやらなかったら、もっと早くに集落がつぶれるかを聞いたが、あまり確かな表現ではないですね。

事務局： イメージ的なことになりますからね。

永木委員： 効果で定性的な大枠をいうと、ほとんどの道路が郡山のほうに向かっているなかで、町村を南北につなぐこういう農業用道路をすることによって生じる効果はあるのではないですか。町村の広域連携としての物流や農業へのインパクトですとか、そこをもう少しうまく表現してはどうか。

これからはこの程度の規模での事業が多いと思うのですが、非常によい雛型を作ってくれているので、そこをもっとPRしていけばよい。

それから、機構営で区画整理、客土、暗渠、道路を整備したが、小さい団地で、そういうのは中山間地域で実は一番取り残されているところであり、機構事業だからそれをちゃんと拾い出していると、最初のうたい文句にすべき。

定量分析では、15ページの費用対効果分析の記述と絵が対応しないので、絵を使って説明するのであれば、4つの効果の文言が一致しなければいけない。絵のほうで計算されているのであれば、15ページのほうに反映した文章にならなければいけない。

たとえば、農地保全と高生産性農業を両方足し算するとダブルカウントになります。ですから、もうちょっと絵の書き方を計算の仕方と合わせて調整する必要がある。

背景問題として「高齢化の進行」とか「産地間競争の激化」、これは一番上に書いて、こういう問題があるとそれに対応するためにこの事業が農用地整備とか排水改良とか農業用道路とか問題解決の方法として事業をやっている、事業を入れたことによって効果がどういうものであり、それから波及効果がなんであるという流れで絵を書かれたほうがよい。ちょっと絵の書き方を工夫されたほうがよいと思う。

それから、最後に見せてもらった団地で、災害防止効果が私は非常にインパクトがあり、そういう話（整理）があってもいいと思いました。

たとえば農業用道路をメインに話をするのであれば、「隣の町との広域連携で事業が動き始めた」とか、「共同選荷場ができた」、あるいは「営農組織が村を越えて何か取り組みが始まった」とか、そういったデータの捉え方、情報事例を入れてもらえると、地域の活性化の裏付けになり、おもしろいと思います。

事務局： 15ページの項目とフロー図を整理し直します。

鈴木委員： 費用対効果の算定は何らかの雛形があるのですね。林業の話については、それに基づいて載せてあるのだろうと直感的に思った。林業実態の説明がないのに、これがあるのはなんだろうと。効果に合わせた説明の工夫が必要です。

永木委員： 森林は、国有林ですか、民有林ですか。

事務局： 民有林です。

熊谷委員長： このマップは総合的なマップなので、ここからどの部分を点数化するか、さらに細項目を作らなければならない。論理は分かるが。

事務局： 効果のイメージを体系的に整理してみたのですが、直接的には結びつくように再整理します。

永木委員： 農業用道路のメンテナンスも、地元の人、受益者がやっている。水路等は地元の人がやろうという気持ちになっている、ありがたいという気持ちが出てきているわけですね。

事務局： 集落活動が、重要な問題になってきます。

熊谷委員長： それから、(現地で聞いた)飼料費が1 kg 当たり5円安くなるという記述が抜けている。堆肥輸送は書いてあるが、飼料輸送は書いていない。乳の輸送が迅速にできるようになったという話はどこに入りますか。

永木委員： チーズに使う牛乳は長時間の輸送はよくない、ガタガタ揺るともう良いチーズが作れない、そういう品質効果もあるはず。

この地域は、白河も近いし、郡山も、いわきにも近い。こういう農業用道路ができることによって、物流にどういう動きが起こったのか。

事務局： 物流は、主に郡山方面に行く、また、他にいわき方面に向かいます。

永木委員： 野菜、牛、高原野菜はマーケットがいろいろと広がる。

事務局： 農協や関係機関への聞き取りをもとに、代表的な作物を比率で物流を計算しています。

熊谷委員長： それは文章できちんと書けばよい。

永木委員： 3ページで専業農家は増えており、それ自体は大変結構なことですが、じいちゃん、ばあちゃんの専業農家が増えているのか、若い担い手の専業農家が増えているのかを見極めをしてほしい。

鈴木委員： 専業か兼業かは分かりませんが、11ページに65歳以上の就農人口が増加している要因として、「定年後の就農者が増加している」と書いてあるのは、こういう表現でいいのか。たとえば、兼業農家は定年前の農業農家人口に入っていないのか、定年後に新規に農業に参入したという意味なのか。

事務局： 他に仕事をもっている場合は「定年後に販売農家となった」ということではないでしょうか。

加藤委員： 色々な参考資料がありますが、最終的に効果の報告書としてこのスタイルで公表するのですか。

事務局： これを4～5枚にまとめてプレスリリースします。

加藤委員： アンケート調査結果を書くときに、資料の中にいつ実施した等を記載したほうがよい。

永木委員： どういうサンプル調査を、どういう方法で、いつ実施したのか等は書くべきです。

熊谷委員長： 増えた、減ったという数字だけでなく、それをつなぐ、なぜそうなったのかという議論が必要だと思います。実は、そのなぜそうなったのだろうかというところを、(大きな減少を)ある程度止めるのにこの事業が役立ったのかかもしれない、その辺をにおわせながら、もう少し丁寧に書いてみてください。

熊谷委員長： 常識的に通用できるものもあるでしょう。

事務局： 市町村とも確認しながら、対応させて頂きたい。
データとして大きなところはきちんと裏付けて、アンケート結果等で使える部分を使い、分かりやすく整理していきたいと思います。

熊谷委員長： 最初のほうと後のほうの説明が切れてしまっているので、最初説明から最後に集約していくんだ、そういう作業ができるように、読んでいて分かるようなまとめ方が必要だろうと思います。

鈴木委員長： 生産面積は県平均よりも落ちた、粗生産額は県平均の減少ほどではないと書いてある、それを追っかけていくと事業の評価にすごく結びつくかもしれない。汎用化や集約化とか、なぜそういうところにスポットを当てないのだろうか。一般的に考えれば、なんでそういうことが起きるのかとなるだろうが、そういうところにこそポイントが、ヒントがありそうな気がする。それをそのまま記述しているからもったいない。

熊谷委員長： それでは、よろしいでしょうか。それでは、いっそうの作業を進められることをお願いしてこの委員会は終わります。

事務局： ありがとうございました。ご指摘いただきました点につきましては資料を点

検討をいたしました。なるべくご意見に沿う形でまとめていきたいと思っております。

(別紙)

平成18年度緑資源機構事業石川南部区域事後評価第三者委員会(第1回)
出席者名簿

事後評価第三者委員

氏名	役職
加藤 徹	宮城大学教授
木村 美智子	東北文化学園大学助教授
熊谷 宏	東京農業大学教授
鈴木 浩	福島大学教授
永木 正和	筑波大学教授

(五十音順)

事後評価委員会関係者

氏名	役職
鈴木 和也	農林水産省農村振興局総務課設計技術指導官
正木 純彦	緑資源機構顧問
村松 睦宏	" 東北北海道整備局副局長